幼児教育におけるナショナル・カリキュラム導入の検討

(その1) 英国の場合

○藤原美子¹・村田カズ²

(¹ハリウッド大学院大学・²聖徳大学短期大学部)

キーワード: 幼児教育, ナショナル・カリキュラム, 英国

On Introduction of National Curriculum in Early Childhood Education — Case of England

Yoshiko FUJIWARA¹, Kazu MURATA²

(¹Graduate School of Hollywood Univ., ²Seitoku Univ., Junior College)

Key Words: Early Childhood Education, National Curriculum, England

目 的

英国では1988年に保守党サッチャー政権が、それまでの学校教育を大きく変えることになる教育改革法 (Education Reform Act) を制定し、初めて全国共通の履修すべき教科と教育内容を「ナショナル・カリキュラム」として定めた。それと同時に学習成果を評価する「ナショナルテスト」が全国的に実施され、結果が公表されることとなった。それまで学校教育に責任を持ち運営していた地方教育当局から「教育の中央集権化」と「教育現場への市場原理導入」により、イニシアティブは政府へという大変革であった。カリキュラム制定と達成目標設定という両輪により、英国の学校教育は大きく変質したのであろうか。英国では満4歳の9月に学校に上がり、4歳から6歳までの学年を「キー・ステージ1」と呼ぶ。ここではある公立小学校のキー・ステージ1の子ども達に焦点を当て、「ナショナル・カリキュラム」の導入前と後において、どのように学校生活や学習現場が変わったかなどについて比較検討したい。

方 法

- 〈ナショナル・カリキュラム以前の小学校の様子について〉
- ・1987年～1988年にケンブリッジのニューナム・クロフト小学校 (公立) に通った、当時5歳と6歳の男児とその両親へのインタビュー (2014年12月実施)
- ・当時の「学校案内書」と学校から「配布されたプリント」
- 〈ナショナル・カリキュラム導入後の小学校の様子について〉
- ・2014年～2015年の、ニューナム・クロフト小学校の「学校案内書」と毎週配布される「ニュースレター」
- ・ナショナル・カリキュラム (2014)

結 果

1. キー・ステージ1 (4歳から6歳) のクラス編成の変化

- 1987-1988** 4歳, 5歳, 6歳は1クラスずつ
4歳から6歳までの合同1クラス
- 2014-2015** 4歳1クラス, 4歳と5歳の合同1クラス,
5歳と6歳の合同2クラス

●5歳児がどのクラスに入るかは、子どもの発達水準、親の教育方針などによって決める。

2. ナショナル・カリキュラムによる学習内容と到達目標の明確化

- 1987-1988** 算国では自分に合った難易度の課題に取り組み、児童それぞれの学習レベルにかなりの差。
- 2014-2015** 細かく教育内容や児童の到達目標を設定。
- 3. 才能に恵まれた児童への積極的な支援**
- 1987-1988** 優秀児に対し特別なコースは設置していない。
- 2014-2015** 上級学年や中学校との合同学習、大学の協力、プロの児童作家によるワークショップなど。

4. 生活面の変化

- 1987-1988** 学期中にバカンスに行く家庭もあり、おおらか。昼食は弁当持参または自宅。
- 2014-2015** 理由なしの欠席は年間報告書に記録される。

学期中の休暇は認められない。2週間以上休むと在籍取り消し。昼食は弁当持参または給食。

5. 学校の強みを積極的にアピールするようになった。

2014-2015 国のカリキュラム以外に、国際色豊かな学校の特色をカリキュラムに取り入れ賞を受ける。

考 察

以前は算国において各自のレベルに合わせた自学自習のため子どもの到達レベルはまちまちだった。現在は緻密な達成課題と目標を設けたナショナル・カリキュラムに応えるため、教師が指導しやすい環境を整え (成熟度を考慮に入れた5歳児のクラス編成など)、学校と家庭の協力 (親対象の算数指導講座が開かれる) によって子どもの学力向上を図るなど変わってきている。この落ちこぼれ対策と同時に積極的に優秀児を伸ばす機会を設けるようになった。「教育現場への市場原理導入」は学校間の競争意識を産み、学校の評判を上げる努力がなされているようである。以前は自宅で昼食を取る子どもが多かったが、それがなくなり代わりに給食ができたのは働く母親の増加が原因だろう。生活面でバカンスなどによる長期休暇や遅刻に厳しくなったのは、学力だけではなく学校の管理運営も評価の対象となり、そこで問題となるからと思われる。以前は遠方に住む子ども親が強く入学を希望すれば校長の判断で入学が許可された。しかし現在は通学区域が明確に定められ、諸条件が加味されて判断されるものの校長ではなく地方教育当局が入学決定の判断を下す。「教育の中央集権化」により、校長の権限は減少していると思われる。算国は時間数の縛りがあるが他教科は日本のように法的な授業時間数規定がないため、カリキュラム以外の学校独自の教育を盛り込んでいるところは以前も現在も変わらない。

伝統的に英国の幼児教育は一人一人の子供の興味関心や自発性を重視し、自分のペースで学んでいく「個人主義」であり「子ども中心主義」であった (Kwon, Young-Ihm, 2002)。1996年のカリキュラムの枠組みの中でそれまでの「子ども中心主義」について再検討され、4, 5歳児の「読み書きと算数」の学力向上が主張されるなど、長く続いてきた理念の見直しが行われている。幼児教育へのカリキュラム導入と達成目標設定は「子ども中心主義」を脅かし、課題習得を最優先とする「教師主導型」が優勢になり、子どもの自主性が損なわれるのではないかと危惧する専門家もいる。この問題は、伝統的に「子ども中心主義」の幼児教育から「教師主導型」の小学校教育へ移行する日本の場合と共通することに気付かされた。

引用・参考文献

- Kwon, Young-Ihm, "Changing Curriculum for Early Childhood Education in England" Early Childhood Research & Practice 4.2(2002): n2.
- 吉田多美子 (2005) イギリス教育改革の変遷 国立国会図書館調査及び立法考査局レファレンス, 55(11), 99-112.
- National Curriculum in England (2014): Department of Education, Government of U.K.